

1 妖精の山査子^{さんざし}

アルスター・バラッド

「おいでよ アンナ 退屈な糸紡ぎなんかもうやめて
ほら お父さまは丘の上 お母さまはお休み中
岩場の上で ハイランド・リールを踊りましょう
崖の上にある妖精の山査子^{さんざし}を囲んで踊りましょう」

アンナ・グレイスの戸口で 娘たちが声かけた 5
緑のガウンを着た三人の陽気な娘たち
アンナは糸巻竿と退屈な糸紡ぎ車を脇に置いた
四人の中では一番のべっぴん

四人は静かな夕暮れ時のチラチラ光る灯りを横目に 10
白くしなやかな首と足首をさらして駆けていく
眠気を誘う調べを奏でるゆるやかな流れを渡り
薄霧^{うすもや}に浮かぶ岩山をよじ登って

娘たちは手をつなぎ うたいながら
丘の小道も恐れずに進んでいき
ついにナナカマドが美しく茂る場所へやってくる 15
そばには鬱蒼^{うつそう}とした妖精の山査子^{さんざし}

山査子^{さんざし}は高く細いナナカマドの間に茂り
まるで膝に双子の孫娘のいるご婦人のよう
赤いナナカマドの実が 低い白髪交じりの山査子^{さんざし}の頭にかかり
まるで優しく口づけしているかのよう 20

立派なナナカマドをはさんで二人ずつ
陽気な四人の娘たちは一列に立った
樹々の間をスイスイとまるで水面を滑る鳥のように走り抜ける
ああ でも鳥でさえこの娘たちほど楽しくはうたえまい

霧^{もや}がかかり しんしんと冴えわたる静けさは 25
罎^{こだま}を返すこともなく その歌声を飲み込む

夕暮れがゆっくりと丘の動きを止め
黄昏^{たそがれ}が時を夢の中へといざなう

鷺の影が雑木林^よを過ぎる時に

空からヒバリの鳴き声が消えるように 30
突然の恐怖に 胸の鼓動は激しくなり
次々と娘たちは声を失い しゃがみ込む

というのも 空から 草茂る大地から

ナナカマドの樹々から その間の大きな山査子^{さんざし}から 35
かすかな魔法が放たれて娘たちの体を吹き抜ける
四人は草の上に倒れ込む

静かにしゃがんで 少しずつ身を寄せ合い

華奢な腕を回して伏せた真っ白な互いの首を隠し合い
今度は露^あわになった腕を隠そうとするが 40
そうするとすくめた首がまた露^あわになる

腕を巻きつけひれ伏して みんな頭を下げる

聞こえてくるのはただ人間の胸の鼓動
そこに静かな妖精の群れの柔らかな足音が
まるで空から流れ落ちる川のように滑りくる

声をあげることも祈りの言葉をつぶやくこともできず 45

三人は恐怖に怯えて口もきけない
色白のアンナ・グレイスがそっと引っ張られていくのを感じたから
誰が引っ張ってるのかなんて見ることもできない

娘たちは離れていくアンナの金髪が自分たちの髪にからまり

アンナの頭が離れた瞬間 その巻き毛がぱさっとほどけるのを感じる 50
娘たちは動かぬ腕からアンナの腕が滑り抜けるのを感じるが
誰も目を開けて確かめてみることもできない

かすかな魔法が重くその感覚にのしかかる

大きな悲しみと信じがたいほどの危険に満ちたこの夜の間ずっと 55
恐怖と驚きで震える目を開けることはできない
冷たい大地から立ち上がることもできない

やっと大地がその露に濡れた体を起こし夜から抜け出し

魔法のかかった山々と 川の流れる谷に朝が訪れ
黄金に輝く光の中に霧が次第に晴れるにつれて

恐れおののく三人は 急いで逃げ帰り

心配する友人たちにこの悲しい出来事を話すが誰も信じない

娘たちは痩せ衰えていき 一年と一日もたたぬうちに死んでしまった

そして再びアンナ・グレイスの姿を見ることもなかった

(三木菜緒美訳)